

平成20年度病害虫発生予報第3号

平成20年5月8日
鳥取県病害虫防除所

予報の概要

| 区分 | 農作物名 | 病害虫名 | 発生時期 | 予想発生量 |
|------|---------|---------------|----------|-------|
| 普通作物 | イネ | いもち病(葉いもち) | 平年並 | 平年並 |
| | | 縞葉枯病(ヒメトビウンカ) | 平年並 | 少ない |
| | | ニカメイガ | 平年並 | 少ない |
| | | イネミズゾウムシ | やや遅い | 平年並 |
| 果樹 | ナシ | 黒斑病 | 平年並 | やや多い |
| | | 黒星病 | 平年並 | 平年並 |
| | | クワコナカイガラムシ | やや遅い | 平年並 |
| | | ハダニ類 | 平年並 | やや多い |
| | リンゴ | アブラムシ類 | やや遅い | 平年並 |
| | | 斑点落葉病 | 平年並 | 平年並 |
| 果樹全般 | ハダニ類 | 平年並 | 平年並 | |
| 野菜 | スイカ | カメムシ類 | 平年並 | やや多い |
| | | 菌核病 | 平年並 | 平年並 |
| | | つる枯病 | 平年並 | 平年並 |
| | スイカ、メロン | うどんこ病 | 平年並 | 平年並 |
| | | アブラムシ類 | やや遅い | 平年並 |
| シバ | ハダニ類 | 平年並 | 平年並~やや多い | |
| | | 葉腐病(ラージパッチ) | 平年並 | 平年並 |

[参考]

気象予報(抜粋)

1か月予報(5月3日~6月2日:5月2日、広島地方気象台発表)

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

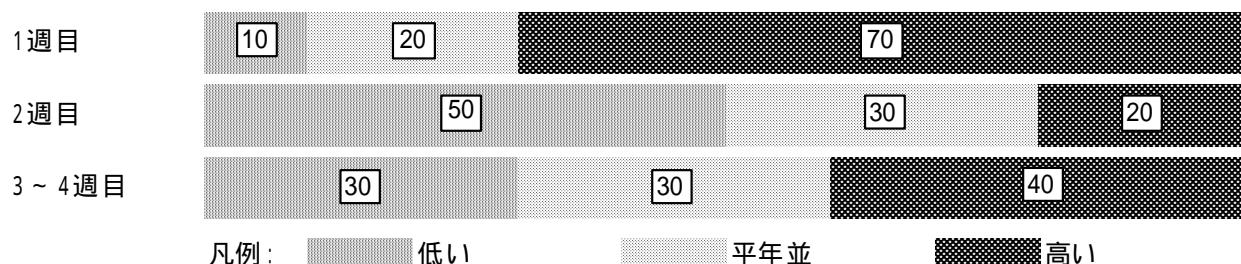
天気は数日の周期で変わるでしょう。気温の変動が大きいです。

向こう1か月の気温は、平年並または高い確率ともに40%です。週別の気温は、1週目は高い確率70%、2週目は低い確率50%です。

<向こう1か月の気温、降水量の各階級の確率(%)>



<気温経過の各階級の確率(%)>



普通作物

[イネ]

1 いもち病(葉いもち)

(1) 予報の内容

| | |
|------|------|
| 発生地域 | 県下全域 |
| 発生時期 | 平年並 |
| 発生量 | 平年並 |

(2) 予報の根拠

ア 昨年の穂いもちの発生は平年より少なく、種子の保菌率は低いものと見込まれる。

イ 4月下旬～5月上旬の気象条件、向こう1か月の気象予報は、苗いもちの発生にやや助長的である。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 種子消毒を徹底するとともに、種もみが露出しないように覆土を行う。

イ 苗におけるいもち病は急激に蔓延するため、発生がみられた場合は直ちに葉いもち防除粉剤又は水和剤を散布し、その後は病勢に応じて追加防除を行う。

ウ 育苗箱施用剤を使用する場合は、使用時期及び使用量を守って均一に散布する。

エ 補植用置き苗が本田での発生源となることが多いので、補植後の残り苗は速やかに処分する。

オ 山間部などのいもち病の常発地では、育苗箱施用剤を使用しても十分な効果が得られない場合があるので、ほ場の見回りなどを行い早期発見に努める。

カ 県内広域で、シタロン脱水酵素阻害型メラニン合成阻害剤(ウィンアドマイヤー箱粒剤、デラウスプリンス粒剤10など)の耐性菌が発生しているので、当該薬剤の使用を控え、代替薬剤を使用する。

2 縞葉枯病(ヒメトビウンカ)

(1) 予報の内容

| | |
|------|------|
| 発生地域 | 県下全域 |
| 発生時期 | 平年並 |
| 発生量 | 少ない |

(2) 予報の根拠

ア これまでの気温の推移、及び向こう1か月の気象予報より、ヒメトビウンカの発生時期は平年並と見込まれる。

イ 昨年の本病の発生量は少なかった。

(3) 防除上注意すべき事項

県東部などの常発地では、ヒメトビウンカに対して登録のある育苗箱施用剤を使用して防除を行う。

3 ニカメイガ

(1) 予報の内容

| | |
|------|------|
| 発生地域 | 県下全域 |
| 発生時期 | 平年並 |
| 発生量 | 少ない |

(2) 予報の根拠

ア これまでの気温の推移、及び向こう1か月の気象予報より、本虫の発生時期は平年並と見込まれる。

イ 昨年の第2世代幼虫の発生は少なかったため、越冬量は少ないものと見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

近年、局地的ではあるが、発生が増加している地域がみられているので注意する。常発地では、本虫に対して登録のある育苗箱施用剤を使用して防除を行う。

4 イネミズゾウムシ

(1) 予報の内容

| | |
|------|------|
| 発生地域 | 県下全域 |
| 発生時期 | やや遅い |
| 発生量 | 平年並 |

(2) 予報の根拠

ア 5月2日現在、予察灯への誘殺は確認されていない。

イ 5月2日現在、県東部の早期(4月下旬)田植ほ場への侵入は認められていない。

ウ 5月6日現在の越冬世代成虫の飛翔活動に必要な有効積算温量、及び向こう1か月の気象予報によると、本虫の水田への侵入盛期は、平年に比べてやや遅くなると見込まれる(平坦部:5月第4~6半旬、中山間地域:5月第6半旬~6月第2半旬)。

エ 前年の第1世代成虫の発生量は平年並であった。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 育苗箱施用剤の防除効果が高いので、使用時期及び使用量を守って1箱ずつ均一に薬剤を散布する。

イ 育苗箱施用剤による防除を行っていても本田での食害が急増する場合には、追加防除を行う。

ウ 直播栽培などの育苗箱施用剤を使用していない水田において、被害葉が顕著に増加し、成虫密度が1株あたり0.5頭以上になった場合は、粒剤などで防除を行う。

果 樹

[ナ シ]

1 黒斑病

(1) 予報の内容

発生時期 平 年 並

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 県予察ほ場における開花期以降の胞子飛散数は平年を下回った。

イ 5月1日に行った県内15園の巡回調査によると、幼果のポリ袋検定法による発病果率は4.1%（平年：2.7%）と平年をやや上回った。なお、園によっては、発病果率が平年に比べて高くなっている。

ウ 本年のナシ園における病芽及び枝病斑などの越冬菌密度は、平年に比べてやや低いが、一部のナシ園では、越冬菌密度が県平均に比べてやや高い園が認められる。

エ 向こう1か月の気象予報によると、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 今後、気温の上昇とともに胞子飛散数の増加が予想されるため、出来るだけ早く小袋掛け作業を終了する。特に、降雨直後は胞子飛散数が増加するため、薬剤防除を徹底する。

イ 薬剤は、小袋掛け直前にユニックス顆粒水和剤47の1,500倍液、有機銅フロアブル（キノンドーフロアブル又はドキリンフロアブル）1,000倍とポリオキシソルボンA水和剤1,500倍の混用液、ポリペリン水和剤1,500倍液など、小袋掛け終了後にはジアリン水和剤600倍液などを散布する。

ウ スピードスプレーヤによる防除地域では往復又は縦横走行を行い、手散布地域では散布むらのないよう丁寧に薬剤散布を行う。

2 黒星病

(1) 予報の内容

発生時期 平 年 並

発生量 平 年 並

(2) 予報の根拠

ア 5月上旬現在、現地ほ場での発病はほとんど認められていない。

イ 県予察ほ場における開花期以降の果そう基部病斑からの分生子の飛散数は平年を下回った。

ウ 向こう1か月の気象予報によると、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発病した幼果や葉は取り除き、園外に持ち出し処分する。

イ 薬剤は、ユニックス顆粒水和剤47の2,000倍液、ジラム・チウラムフロアブル（ダイボルトフロアブル又はパルノックスフロアブル）500倍液、有機銅フロアブル（キノンドーフロアブル又はドキリンフロアブル）1,000倍液、アントラコール顆粒水和剤500倍液、ベルコートフロアブル1,500倍液などを散布する。

3 クワコナカイガラムシ

(1) 予報の内容

発生時期 やや遅い
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 前年度、本虫による果実被害は平年並であった。

イ 越冬卵のふ化開始は、やや遅い5月4日(平年:4月30日)に認められたことから、ふ化最盛期はやや遅い5月8日前後(平年:5月4日)と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 昨年、被害の多かった園や多発園では5~7日間隔で、次の時期に2回の防除を行う。

・幼虫ふ化最盛期 5月 8~13日
・幼虫ふ化終期 5月14~19日

少発園では5月14日前後に1回防除を行う。

イ 薬剤はスプラサイド水和剤1,500倍液又はアプロード水和剤1,000倍液などを使用する。

ウ 越冬世代は、第1世代及び第2世代よりふ化時期が揃いやすいので防除を徹底する。

エ 薬剤の散布にあたっては、クワコナカイガラムシが集合する枝葉の他、枝の切り口及び粗皮下などにも薬液が十分かかるようにする。

4 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア クワオオハダニの越冬卵のふ化初日は、平年より5日早い4月13日(平年:4月18日)に認められたが、ふ化最盛期は平年並~やや遅かった。

イ 5月上旬現在、県予察ほ場におけるカンザワハダニ、ナミハダニは平年並、クワオオハダニはやや多い発生となっている。

ウ 向こう1か月の気象予報によると、本種の発生にやや好適である。

(3) 防除上注意すべき事項

発生が多い園では、カネマイトフロアブル1,500倍液などを散布する。

5 アブラムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 やや遅い
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月第1半旬現在、県予察ほ場におけるワタアブラムシの寄生新梢率は0%(平年:12.4%)で、発生時期はやや遅く、発生量はやや少ない。

イ 向こう1か月の気象予報によると、本虫の発生にやや好適である。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発生が多く認められるナシ園では、アドマイヤーフロアブル5,000倍液などを散布する。

イ アドマイヤーフロアブルの使用にあたっては、連用による薬剤抵抗性の発達を避けるため、年1回の使用とする。

[リンゴ]

1 斑点落葉病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 昨年の本病の発生量は平年並であったため、越冬菌密度は平年並と見込まれる。

イ 向こう1か月の気象予報によると、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤の散布間隔は10日程度とし、散布むらのないように丁寧に散布する。

イ 薬剤は、摘果期にマンゼブ水和剤（ペンコゼブ水和剤又はジマンダイセン水和剤）600倍液など、袋掛け前にはアントラコール顆粒水和剤500倍液など、袋掛け中にはナリアWDG2,000倍液などを散布する。なお、多発した場合には、ジラム・チウラムフロアブル（ダイボルトフロアブル又はパルノックスフロアブル）500倍液などを追加散布する。

2 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月上旬現在、県予察ほ場における本種の発生は認められていない。

イ 向こう1か月の気象予報によると、本種の発生にやや好適である。

(3) 防除上注意すべき事項

本種の寄生が認められた園では、ニッソラン水和剤2,000倍液などを散布する。

[果樹全般]

1 カメムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 5月上旬現在、予察灯への誘殺数はチャバネアオカメムシでやや多く、クサギカメムシは平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報によると、本虫の発生時期はほぼ平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

カメムシ類の発生が認められる園では、ジノテフラン水溶剤（アルバリン顆粒水和剤又はスタークル顆粒水溶剤）2,000倍液などを散布する。

野 菜

[スイカ]

1 菌核病

(1) 予報の内容

発生時期 平 年 並

発生量 平 年 並

(2) 予報の根拠

ア 5月上旬現在、一部の現地ほ場において、本病の発生が認められている。

イ 本病はやや低温（15～20）で、降雨が続くと発生が多くなる。向こう1か月の気象予報によると、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 하우스やトンネル内が過湿にならないように換気を行う。咲き終わった花卉は早く摘み取って除去する。

イ 薬剤は、ベルコート水和剤1,000倍液、スミブレンド水和剤2,000倍液、ロブラール水和剤1,000倍液、カンタスドライフロアブル1,000～1,500倍などを散布する。

ウ ハウスでは、スミレックスくん煙顆粒又はロブラールくん煙剤などを使用してもよい。

2 つる枯病

(1) 予報の内容

発生時期 平 年 並

発生量 平 年 並

(2) 予報の根拠

ア 5月上旬現在、現地調査ほ場における本病の発生は認められていない。

イ 本病は降雨や過湿によって発病が増加するが、向こう1か月の気象予報によると、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ハウスやトンネル内が過湿にならないよう、換気を行う。

イ 本病は株元から発病するので、トンネル栽培のスイカの茎葉には雨がなるべくあたらないようにトンネル開閉を行い、薬剤散布は株元にも薬液が付着するように丁寧に行う。

ウ 雨滴のあたる箇所からも発病するので、薬剤による防除を丁寧に行う。

エ 薬剤は、マンゼブ水和剤（ペンコゼブフロアブル又はジマンダイセン水和剤）600倍液、アントラコール顆粒水和剤400～600倍液、ダコニール1000の700～1,000倍液などを散布する。

3 うどんこ病

(1) 予報の内容

発生時期 平 年 並

発生量 平 年 並

(2) 予報の根拠

ア 5月上旬現在、現地調査ほ場における本病の発生は認められていない。

イ 本病は、25 前後の気温と適度な湿度で発病が増加するが、向こう1か月の気象予報によると、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 本病は、収穫期の草勢低下により発生が多くなるので、初期防除を徹底する。

イ 発生前には、ベルコート水和剤1,000倍液などを散布する。

ウ すでに発病のみられるほ場では、パンチョTF顆粒水和剤2,000倍液、トリフミン水和剤3,000~5,000倍液などを散布する。

エ つる枯病が発生している場合には、ポリベリン水和剤1,000倍液などを散布する。

[スイカ、メロン]

1 アブラムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 やや遅い

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月上旬現在、県予察ほ場(東伯郡北栄町)における有翅アブラムシ類の黄色水盤への飛来量はやや少ない。

イ 5月上旬現在、現地ほ場におけるワタアブラムシの発生量はやや少ない。

ウ 向こう1か月の気象予報によると、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ハウスの換気部分や出入口には寒冷紗被覆を行い、アブラムシ類の侵入防止に努める。

イ 発生初期の防除に努める。スイカのハウス栽培では、着果2週間後までに発生した場合は、DDVP乳剤50の1,000~2,000倍液、その後の果実肥大期にはアドマイヤー水和剤2,000倍液を散布する。トンネル栽培では、ツル引き誘引時期には、チェス水和剤3,000倍液、交配前にバリアード顆粒水和剤2,000~4,000倍液などを散布する。着果後はDDVP乳剤50の1,000~2,000倍液、アドマイヤー水和剤2,000倍液などを散布する。メロンではチェス水和剤2,000~3,000倍液、モスピラン水溶剤8,000倍液などを散布する。

2 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並~やや多い

(2) 予報の根拠

ア 5月上旬現在、現地ほ場における本種の発生は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報によると、発生量は平年並~やや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ハウスなどですでに発生がみられる場合、薬剤の使用基準に従い、スイカ、メロンともに発生初期にニッソランV乳剤1,000倍液、バロックフロアブル2,000倍液などを散布する。多発した場合はコロマイト乳剤1,000倍液、マイトコーネフロアブル1,000倍液などを散布する。

イ ミツバチ交配を行う前には、ニッソランV乳剤の使用は避ける(ミツバチへの影響日数7日)。

[シバ]

1 葉腐病（ラージパッチ）

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月上旬現在、生産芝での本病の発生はほとんど認められていない。

イ 本病は降雨によって発病が増加するが、向こう1か月の気象予報によると、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

本病は、発病前の薬剤散布を基本とするが、すでに、パッチがみられる場合は、発病部位を中心にバリダシン液剤5の500倍液0.5～1L/m²などを、スポット散布する。

[おしらせ]

農薬は、農林水産省の登録番号のあるものを、ラベルをよく読んで使いましょう。
詳しい内容は、独立行政法人 農林水産消費安全技術センターの「農薬登録情報検索システム」から検索できます。(<http://www.famic.go.jp/>)

農薬の使用に当たっては、農薬使用基準を遵守するとともに、周辺への飛散には十分注意しましょう。

< 鳥取県病害虫防除所ホームページ >

アドレス <http://www.jppn.ne.jp/tottori/>

病害虫発生予察情報、フェロモントラップ調査結果（ナシのシンクイムシ類）などの参考情報、病害虫の診断方法などの情報をお知らせしていますので、ご利用下さい。

鳥取県病害虫防除所

〒680-1142 鳥取市橋本 260

TEL : 0857-53-1345、FAX : 0857-53-5647

E-mail : boujyot@titan.ocn.ne.jp

次回の予報発表は、6月5日（木）の予定です。